



災害・防災をテーマとした地理学実習・演習の試み ：神戸大学文学部の場合（特集 東日本大震災と防災 (3)）

藤田，裕嗣

(Citation)

兵庫地理, 60:15-18

(Issue Date)

2015

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003888>



災害・防災をテーマとした地理学実習・演習の試み

ー神戸大学文学部の場合ー

藤田 裕嗣

1. はじめに

勤務校で報告者は 2013 年度 4 月に文化財講座から地理学講座に講座替えされたのに伴い、「地理学実習Ⅱ」と「地理学演習Ⅰ」を担当するようになった。一方、その前年度、2012 年度から科学研究費・基盤研究(B)で東日本大震災復興支援プロジェクトの研究代表者を務め、主宰しており(研究課題「災害復興・防災のための地籍図・古地図を活用した GIS データベースの構築」; 研究期間は 2015 年度まで)、これと連動させた授業を展開させる方針とした。今回ご報告するのは、大学教育における主に 2014 年度後期の試みである。

2. 当初に提示していたシラバス

当初に学生に提示していたシラバスを以下に掲げる。地理学専修に所属する 2 年生が主な対象となった。

①「地理学実習Ⅱ」:「他(不定期、土日)」

〔授業のテーマと到達目標〕実際に街や村を歩くことで、フィールドワークに対する理解を深め、地理学の観点から現地での観察の重要性を体得する。

〔授業の概要と計画〕後期は、統一テーマとして「災害」を掲げ、主に土日を使って、随時、地理学の観点を重視した巡検(excursion)を行う。地理学は、19 世紀における近代地理学としての発展以来、「環境」に対する考察を深め、現地における人間生活との調和を図ろうとしてきた。特に「災害」は、環境に対する過剰な改変によって引き起こされる一面もあり、「持続可能な開発」に関しても目配せしようとする場合、有効なテーマと考えられるから、である。

参加者は原則として全ての回に参加し、事前にレジュメを用意する。事後に簡単なレポートを提出してもら場合もある。

②「地理学演習Ⅰ」:木曜日第 2 講時(10:40~12:10)

〔授業のテーマと到達目標〕テーマ:卒業論文作成準備のための発表演習

到達目標:卒業論文に着手するための基礎的能力の鍛錬

〔授業の概要と計画〕文学部のカリキュラムでは、最終的に卒業論文を課している。地理学の卒業論文は、言語はもちろんとして、特徴的なのが、地図による表現である。卒業論文の作成で前提とされる地理学の素養の会得を目指す。発表形式による演習で進め、各受講生は後期中に 2 回程度の発表が求められる。発表対象となる具体的な内容は、初回に受講生と相談して決定する。

〔成績評価方法と基準〕発表内容 60%+議論への寄与 25%+出席 15%

〔履修上の注意(関連科目情報等を含む)〕文学部専修学生に限る。演習のために、発表の準備を念入りに行うこと。

〔学生へのメッセージ〕卒業論文作成のために必要とされる地理学の素養は、具体的にはマップリーディングなど、各種を挙げられる。地理学演習Ⅱと連動させ、卒論完成に向けて、発表内容を徐々にレベルアップしていくよう、心がけて欲しい。また、受講生との議論は、地理学の素養を高めるのに有効である。意見表明に臆することなく、積極的な参加は、卒業論文のための第一歩になる。

〔キーワード〕プレゼンテーション 論文 地理学研究 読解力 地図 構成力

3. 具体的な授業展開

後期、毎週木曜日の地理学演習Ⅰの授業を中心とした展開は、以下の通りとなる（曜日を特記した以外は、木曜日）。

1)10/2 オリエンテーション：災害、という統一テーマに対する受講生の志向性をまず尋ねる。演習Ⅰとの連動を伝え、実際には月に1回程度、実地に出るため、10月11日以降の土日で受講生が共通して参加できる日時を具体的に探る予定、と知らせる。

2)10/9 藤田からデモンストレーション：2013年度の「地理学演習Ⅰ」で海外に関する論文等を発表してもらった一環として、スペイン・ビルバオに関する下記の文献を忍ばせていた。

小宮一真「スペイン・ビルバオの災害復興—東日本大震災の復興に向けた一つの参考事例として—」みずほ総合研究所 KK（2011年5月）

去る9月15-18日に藤田がビルバオ調査を敢行したので、2013年度に単位修得した3、4年生にも来てもらい、その簡単な報告を藤田が担当し、後に2年生に調べる際のモデル提示も狙った。

この時に提示した「主旨」は、以下の通りである。
「ビルバオは、かつて鉄鉱石を利用した鉄鋼業が盛んであったが、1983年に襲った大洪水で壊滅的な被害を受け、市当局は方針を大転換、『グッゲンハイム美術館』を誘致して、『ビルバオの奇跡』と賞される復興を遂げた。東日本大震災復興にとっても参考になる、という上掲のレポートに基づいて、地理学的な『観察』をしてきた。写真を用いて、その成果を簡単に提示する。』

3)10/16：演習と実習も兼ね、主体は、大きく災害か、防災をテーマに調べてもらい、11/7～17に予定される展示会「歴史地震に学ぶ津波の実態」のポスターにまとめる課題について説明した。受講生3名に示した調査項目案は以下の通り9点で、取り上げられたテーマには◎印を付した。

＜阪神淡路大震災関係＞

・淡路島の野島断層と周辺の被害／・海事科学部（当時は神戸商船大）前における阪神高速道路の被害／・阪神淡路大震災におけるボランティア活動（特に学生）

＜東日本大震災関係＞

・阪神淡路大震災との違い（観点は、できればコミュニティの違い）◎A

＜その他＞

・阪神地区における過去の地震災害（慶長地震まで）◎B

・京都における地震被害／・2008年都賀川の水難事故

・1938年阪神大水害◎C

＜四国＞

・南海地震の津波被害

4) 10/20（土）：「地理学実習Ⅱ」と連動させ、神戸まちづくり会館（神戸市中央区元町通4-2-14）でC阪神大水害のビデオを観察した。さらに、神戸市埋蔵文化財センター（市内西区糺台6丁目 西神中央公園内）にも足を延ばして、展示「大地に刻まれた災害史」を見学した。

なお、10/23には見学内容を巡ってディスカッションした。

5・6)10/23、30：展示会ポスターに向けた調査内容を報告し、練磨した。

7) 11/6：ポスターの準備に宛てた。展示会「歴史地震に学ぶ津波の実態」本番の詳細は、菊地報告に委ねることとし、ここでは概要のラインアップを紹介するに留める。

・受講生A「東日本大震災と阪神・淡路大震災：コミュニティ意識の変化—仮設住宅・復興住宅入居と文化財保全」

1. 阪神・淡路大震災における仮設住宅と「孤独死」問題 2. 東日本大震災における仮設住宅

・受講生B「大坂を襲った南海津波」

1. はじめに 2. 安政南海地震の地図史料
3. 津波を記録した2つの石碑

・受講生C「戦時下における阪神大水害」

1. 阪神大水害の概要

2. 被害状況 3. 被害拡大の要因 4. 復興事業 5. ボランティアの活動

8) 11/13：展示会の中締め。年内から年明けまでの予定を指示し、固める。

9) 11/17(月) 10:00-10:30 : 報告者は「ESD 演習」も担当しており、その受講生に展示会場まで来てもらい、ポスター発表者とのディスカッションを試みた。

1 0) 11/20 : 発表①・②予定を報告し、討論した。

1 1) 11/27 : 発表①外国の災害に関する日本語文献-1、テーマ : 2009 年 4 月イタリア・ラクイラ地震

中村功「防災体制のありかたについての一考察ーイタリア・ラクイラ地震を発端に」『松山大学論集』21-4、2010 年

1 2) 12/4 : 同上-2、テーマ : 2013 年 11 月フィリピンにおける高潮被害

宮本守ほか 「台風 30 号によるフィリピン国における高潮災害と予警報活動」 土木技術資料 56 巻 6 号 2014 年

1 3) 12/11 : 同上-3、テーマ : 2010 年アイスランドの火山噴火に伴う航空機規制

安田成夫・梶谷義雄・多々納裕・小野寺三朗「アイスランドにおける火山噴火と航空関連の大混乱」『京都大学防災研究所年報』54、pp.59-65、2010 年

1 4) 12/18 : 12/23 に実施する「地理学実習Ⅱ」と連動させた巡検の内容を見定め、レジュメの作製に宛てた。

1 5) 12/23 (火・祝) : 発表② 「地理学実習Ⅱ」と連動させ、A~C の内容を実地へ赴き、説明してもらった。

1 6~) 年明け発表③ : 『人文地理』、『地理学評論』、『経済地理学年報』、『歴史地理学』、『地理科学』の 5 誌に限り、できれば外国に関する論文を発表する。災害のテーマは外し、受講生各自が興味あるテーマとする。本報告の趣旨とは内容が外れるため、今回の報告では割愛する。

4. 関連させたバス巡検の実施

実習の内容と関連させて、1/31(日)に淡路島を経由して徳島市方面を目的地とした巡検を実施した。

受講生である 2 回生は、ちょうど阪神・淡路大震災が起こった年(正確には翌年度)に生を受けており、実際には地震、震災を知らないために、震源地で地震発生直後の状況を保存しようとしている野島断層保存館の見学のみならず、地震や津波対策について他の世代との交流を企図した。具体的には、震源地に近い富島地区を県立淡路高校の生徒さんのご案内で見学した。交流の相手は、当初、徳島大学の学生を考えて交渉を始めたものの、時期的に学生が少なくなっており、無理強いするのは断念して、高校生に変更した。

最後に徳島大学総合科学部まで赴き、塚本章宏准教授にお願いして、「GPS を用いた津波避難訓練の分析ー徳島県海陽町穴喰地区における取り組みを事例にー」と題した研究発表をお願いした。県南をフィールドに GIS を活用し、子供たちをも対象とした地震対策の試みをご説明いただいた。

受講生によるレポートを活かしながら、野島断層保存館と高校生との交流を中心に報告したい。

a) 野島断層保存館

文学部では、地理学以外に文化財学講座が併設され、「文化財学」、「景観文化財学」というユニークな授業科目も講じられている点が特徴である(担当教員が菊地真准教授)。それを受講しているからこそ、と思われる感想も散見される。「実際にずれた断層と共に、被災した家が同時に保存されていることで、実際に家の中がどのような状態になるのかが明確になり、どこを補強する、どういう対策をするべきかを検討する良い契機となると感じられた。また、震災遺構として保存されるという判断が少し遅れたために、実際の断層のずれが起こった直後とは状態が異なっているという説明は意外に感じられ、また時間の経過とともに断層の一部が崩れる、湿度から苔が生えるなど、震災遺構の保存にも多くの技術的な管理が必要であり、それには地方自治体の行政や住民の協力が不可欠であろう。特に断層のような自然の一部を震災遺構として留めようとする場合は、困難を伴うと感じられた。」「実際に断層を目にすると、想像よりも大きくずれ動いていたので驚

いた。断層とともに動いたあぜ道や植木なども一緒に保存されており、またトレンチで掘って地層の断面が見えるようになっていた箇所もあったので、視覚的にもわかりやすかった。横には断層から 1m 離れていたおかげで壊れずに残った民家があり、断層の真横にあるからといって建物自体が必ず大きな被害を受けるとは限らないことが、意外に感じた。」

b) 高校生と交流しながら、豊島地区における被害の説明

「淡路高校や全国の高校に、防災を学ぶ選択科目があるということを初めて知った。」

「富島地区では住民の安否確認が震災当日の昼頃には完了していたという説明をしてもらった。都市部と比べて住民同士のつながりが強いために速やかな安否確認ができたという。災害による犠牲者を減らすには、避難所整備や堤防建設、耐震工事などの対策はもちろん、地域社会のつながりといったソフト面の対策も普段から行う必要があると改めて気づかされた。」

「震災以前は道幅が狭く避難に苦労したという話を聞き、震災をきっかけに災害に強いまちづくりがなされたのだと気づかされた。しかし、震災後の区画整理に時間がかかり、その間に住民が島外へ流出して空き地が増えたという説明で、震災後のまちづくりに関して神戸とは異なる問題があるのだと知った。」

「富島の集落では倒壊した家屋が道を塞ぎ避難の障害になったというお話を受け、もし（中略）自宅付近で軒並み家屋が倒壊したらと考えた」云々、と自分自身の問題に照り返した感想が続いている。その帰結は、「各個人ができる限りの備えをすることが第一なのは間違いないが、自治体や国のレベルによる対応も、防災の重要な部分を占める点も、今回学ぶことができた。」とあり、社会の問題へと展開されている。さらには、「今回自分と同じように震災後に生まれた高校生と交流できたことで、今後震災を学び伝えてゆくためには自分たちの世代も役割を背負っていかなければならないと思うに至った点

は、自分にとっては大きい」という指摘は、今回の試みの意義を雄弁に物語っていると評価したい。

5. 成果と課題 藤田が担当する地理学実習Ⅱと演習Ⅰと連動させ、災害、防災をテーマとして2年目になる。とは言え、その最終的な評価は、受講生が卒業論文に結実させる来年度以降にすべきであろう。

2年目の今年度の特徴は、展示会と連動させた点である。デモンストレーション能力は、確実に上がっていると確信される。

〔付記〕 2014年12月14日に開催された兵庫地理学協会特別例会でポスター発表をした際、原稿を元にしながら、年明けの展開を中心に敷衍した。

（ふじた ひろつぐ：神戸大学大学院人文学研究科）